

国際共通語としての英語

鳥飼玖美子（著）

マコナキー・トロイ

Abstract: This paper is a review of the book “Kokusaikyoutsuugo toshite no eigo”, published in Japanese by Professor Kumiko Torikai in 2011. This review provides an outline of the primary content of each chapter, followed by discussion of three issues which emerge in the book: the goal of English education, the notion of “intelligibility”, and the development of intercultural competence.

Keywords: *English as an international language, Japan, intercultural competence*

1. はじめに

グローバル化が進んでいくこの時代においては、異文化間コミュニケーションの問題が非常に注目を集めている。そのような中、世界中で使われている様々な言語から突出して、英語が主要な国際共通語としての地位を獲得しているという認識が一般的であると言えるだろう。しかし、その一方で、各国の英語話者は具体的にどのような英語能力を目指せばいいかという難問が浮上している。英語を公用言語に認定している国に限らず、国境を越えた、まさに国際的なコミュニケーションのために使われる英語というのはどのような性質のものであるべきかということは、様々な観点から議論されている。日本においても、いわゆる国際共通語としての英語について、政府や教育関係者が本格的な議論を展開しはじめた。この議論の参加者の一人である立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授の鳥飼玖美子氏は2011年に講談社現代新書より『国際共通語としての英語』という本を刊行した。本書は国際共通語としての英語の諸相、従来の日本の英語教育の問題点を踏まえ、今後の英語教育の課題を分析している。本稿では、この著書の概要を紹介し、次いで、鳥飼氏の主張する1. 英語教育の目的設定、2. Intelligibility、3. 異文化能力、の3点について評することとする。

2. 概要

鳥飼氏は、本書を通じて様々な主張を展開しているが、目立って一貫しているのは英語学習者の自律的な営みの重要性を強調している点である。国際共通語としての英語を学ぶ側は、英語ネイティブ・スピーカーの真似をするのではなく、とにかく「通じる英語」、要するに、intelligibilityのある英語を目指すべきだと主張する。そのためには、学習者の自律的な営みが必要になるという。これに関連し、第一章では、「通じる英語とは何か」に触れており、著者はジェンキンスが提唱する「Lingua Franca Core」という発想に同調している。これは、国際共通語としての英語のコア（特に音声学上のコア）を構成すべきものについて、英語が共通語として使われている場面を調査することによって、最小限のintelligibleな英語を帰納的に規定していこうという発想である。鳥飼氏は、日本人の英語学習者は英語圏ネイティブ・スピー

カーのような発音ではなく、むしろこの英語のコアに従うべきであると示唆している。英語単語の使用についても、使い方がネイティブ・スピーカーの基準に照らし合わせて多少不自然でも、重要なのは意味を伝える努力であり、その結果ともかくは意味が伝わることだと述べる。また、英語教育に携わるものは、そのような型にはまらない英語使用に対して寛容になる、すなわち、すぐには「誤用として排除すべきではない」(p.26)としている。しかし、文法の学習に関して、「しっかり学んでほしい」としながらも、その学ぶべき対象がある種の *grammatical core* なのか、ネイティブ・スピーカーの文法規範なのかという点について、著者の主張は若干不明瞭になる。

第二章においても、鳥飼氏は、日本人の英語学習者は、自分の言いたいことを自分の言葉で表現できる「発信型」の英語を身につけるべきだという主張をさらに展開している。鳥飼氏によれば、言葉の形式よりも、自分の言いたいことの中身を相手に伝えることを第一に考える必要がある。すなわち、「乱暴な言い方をすれば、英語という言語の基本さえ学んでおけば、あとは話すべき内容を持っていることが決め手」(pp.33-34)。このように、鳥飼氏は最小限の *intelligibility* を確保したうえで、あとは相手とのやりとりの中で努力して分かり合えばいいとしている。しかし、学習者側にしてみれば、どのような英語力を目指せばいいかについてもっと具体的な指標がほしいと考えるのも当然だろう。それに答えるものとして、第二章の後半では、鳥飼氏は欧州評議会の「欧州言語共通参照枠」をひとつの指標として紹介している。

第三章では、国際共通語としての英語のより政治的な側面を取り上げている。英語が一つの重要な資源であるこの時代にありながら、生まれながらに英語を身につけた英語ネイティブ・スピーカーが必然的に特権的な立場を得るといった問題などについて、英語学習者や英語教育関係者が十分認識し、英語のあるべき姿を再考する必要があると主張している。

第四章では、国際共通語としての英語と学校教育の問題に触れている。そもそも学校ではどのような英語教育を目指すべきかという問題提起をしたうえで、新学習指導要領の内容を分析している。鳥飼氏は、「コミュニケーション」に重点が置かれている新指導要領では、英語コミュニケーションそのものがただのスキルに還元されていると指摘する。さらに、これは政策レベルではコミュニケーションという概念についての合意形成が十分なされてこなかったことに起因していると述べる。特に、英語教育の目的をコミュニケーションに設定しているのに、それが「どういう相手と、いかなるコンテキストにおいて、どのような関係性をもって相互作用するのか」(p. 110)という社会文化的な側面が十分構想されていないと批判する。英語が国際共通語として使われる時代だからこそ、こうしたことは明確にしていく必要があると述べる。その際に、英語教育はコミュニケーションのためなのか、異文化理解なのか、その両方なのか、改めて検討することが重要だという。実は、大学の英語教育の目的についても、言葉の学習と英米文化の学習を切り離そうという提言が日本学術会議の中央教育審議会よりなされていると鳥飼氏は明かす。その内実というのは、簡単にまとめると、英語をただの中立的な「媒体言語」にするために、英語に結びついている文化的負荷をなるべく軽くするという他にない。鳥飼氏は、このような動きに対して理解を示している。実際の国際舞台で日本人が相手にするのは欧米人のみならず世界各国の英語話者であるという事実を踏まえれば、英語教育と英米理解を簡単に結びつけるのはもはや適切ではないと述べている。

第五章では、今後の英語教育では文化をどう扱うかという問題についてより細かく分析している。この章における議論で最も重要なのは、英語を英米文化から切り離すことがあっても、英語教育から異文化理解を切り離すことはないという点である。鳥飼氏は、コミュニケーションの相手の言語的および文化的背景が多様化している中で、英語教育では、特定の文化を理解する能力よりも、異文化能力 (*Intercultural Competence*) を目指すべきだという立場を採る。

ヨーロッパやオーストラリアでも、異文化能力の必要性が以前からうたわれている。異文化能力を外国語教育の目的に定める場合、学習の目的はもはやネイティブ・スピーカーのようになることではなく、母国語と学習言語の間を「行ったり来たりすることのできる能力」、もしくは「言語を超え、文化を超える能力」(p.130-131)になる。これは主にイギリスの Byram (1997) が提唱したモデルに基づいており、自分とは文化的背景の異なる相手とのコミュニケーションに必要な一般的な資質を定義しているところが特徴的である。鳥飼氏は、日本の英語教育においては、「文化紹介にとどまらず、異質な文化に向き合った時にどう対応するか」というような視点から本格的な取り組みが必要だと述べる。

第六章では、英語から文化を切り離した場合、学習者の学習意欲にどう影響するかという問題が主眼となっている。従来の英語教育では、学習者の統合的志向、つまり、「英語母語話者と交流したい」あるいは「英米についてもっと知りたい」というような英語ネイティブ・スピーカーや西欧文化に対する肯定的な気持ちを喚起することで学習の意欲につなげようとするものが多かった。しかし、国際共通語としての英語の場合、英米に限らず、英語が話されている様々な地域の人々と交流する意欲や国際社会の一員としての自覚などを促すことが英語学習意欲につながると鳥飼氏は主張する。

3. 論評

本書は国際共通語としての英語とそれに関連する英語教育問題について、私たちに多くを示唆してくれる一冊である。しかしながら、中には議論すべき点があり、私も言及したいところである。

3.1 英語教育の目的から英米理解を切り離すことについて

たしかに、英語が国際共通語として普及した背景を踏まえて、英語教育が目指すのは専ら英米理解である必要はないだろう。しかしながら、これは必ずしも英語を英米文化からなるべく切り離すべきであるという帰結につながるわけではない。最近では、英語を外国語とする話者の数のほうが母語話者の数を上回ったということを強調し、英語はもはやいわゆるネイティブ・スピーカーのものではなく、世界の共有財産であるというディスクールが広まっている。しかし、話者の数ばかり強調していると、「英語の所有」に関する問題の本質を見落とすことになる。英語は世界の共有財産とは言っても、それぞれの英語話者にとって、英語はどのような存在であるか、自分のアイデンティティーに関連してどのような重みがあるかという質的な側面もある。英語母語話者にとっては、英語は単なるツールではなく、自らの国の歴史や伝統および価値観が内在する文化的財産と言っている。英語の所有に関する問題の本質は、英語の使用に関する規範を決めていく権限をめぐる権力争いであり、この観点から、母語話者がこの権限を簡単に放棄したがるのも一理ある。非母語話者の数を強調する考えにもイデオロギー性があり、英語の所有というものは話者の数だけで簡単に決まるものではないのは明らかである。現在においても、英語が母語として話される国もしくは地域の軍事力、政治力および文化力は大きな要素であり、今後も従来の英語は一種の象徴資本 (Bourdieu 1991) でありつづけるだろう。その一方で、「英語＝アメリカ」、もしくは「英語＝イギリス」と固定観念的に捉え、欧米の事情しか知らない英語学習者を大量に生み出すのは、もちろん望ましくない。しかし、英語母語話者にとって、英語は文化的財産であるという認識も必要であり、それを英語教育の場面で教えていくことも重要である。さらに述べると、日本の政治・経済・外交上の戦略について考えると、欧米諸国との関係維持および発展に貢献できる人材は依然として必要とされてお

り、欧米諸国に関する知識は日本国の国益に直結するものである。このような背景を踏まえると、英米理解を英語教育の目的から除外するという判断は、性急すぎる気がしてならない。

3.2 Intelligibility について

本書では、鳥飼氏は、intelligibility というものを主に音声学的な観点から論じているが、intelligibility というのは、本来「意味が伝わることはなにか」という根源的な問題に直結している。確かに、A氏がある命題をB氏に伝達する際、たとえば音声面に少し乱れがあっても、その命題は問題なく伝わるかもしれない。しかし、コミュニケーションは単なる命題レベルでのやりとりではなく、話者の意図を解釈し合う複雑な相互作用を伴うものである。話者の意図というのは、まさにスピーチ・アクトの問題であり、命題Aを発話したことによって社会的に、かつ対人的に何を遂行しようとしているかがポイントなのである。英語コミュニケーションにおいて、話者はお互いに謝罪、依頼、注意をはじめとする多様なスピーチ・アクトを遂行するが、これらはすべて文化的な価値観をもとに解釈される。「従来の英語」について言えば、スピーチ・アクトなどの発話行為に関する慣習は、母語話者の文化的な前提や常識を反映すると共に、それらを相互作用において再構築していくものである (Meier 2010; Wierzbicka 2006)。つまり、文化的知識や常識から成る規範意識が存在するがゆえに intelligibility を確保できると言っても過言ではない。それを仮に英語から捨象した場合にどうなるか、意味の解釈行為が何をもとに成立するか不明瞭である。鳥飼もこの矛盾について意識し、以下のように述べている。

「厳密にいうと、英語という言葉自体に、英語が本来的に持っている歴史や文化が刻み込まれているので、「文化」を教えない、という表現は正確ではないかもしれません。言語から文化を捨象することなどできないのです。せいぜいが「文化的負荷」をなるべく軽くするくらいでしょう。」 (p.121)。

仮に、国際共通語として英語を使う個人が自らの文化に基づいて英語を操るとなれば、コミュニケーションにおける解釈行為は非常に不確定なものになるだろう。つまり、相手の発話行為をどのように解釈したらいいかわからないという本当の意味での intelligibility の問題に直面することになる。逆に、発音や文法は主に命題レベルのコミュニケーションの問題であり、鳥飼氏の言うように国際共通語としての英語にある程度の多様性があっても、理解の支障にならないで済むだろう。しかし、語用論上の英語については、解釈行為ひいては相互理解が成り立つ何らかの共通の規範的な枠組みが必要になる。それを鑑みれば尚更、英語から文化を切り離してしまうと、コミュニケーション、すなわち相互理解が成立するかどうかという疑問を生ずることとなる。そういう意味で、「英語の文化的負荷を軽くする」といった方針については、まだ議論の余地はあると言える。そして、国際共通語の intelligibility に関する議論は、やはりこのようなプラグマティックな観点からも検討していく必要がある。

3.3 異文化能力について

日本の英語教育において異文化能力の養成を目的のひとつに定めることについては、筆者は大いに賛同する。本書では、鳥飼は言語能力と異文化能力をまるで別の独立したものとして扱っているが、考えてみると、「異質な文化に対応する能力」とは、自分が対話している相手を使う言葉がどのように文化に影響されているかを認識して対応する能力であり、それができなければ異文化コミュニケーションの場面でうまく対応していくのは難しいのである。たしかに、国際共通語としての英語の場合は、コミュニケーションの相手が様々な文化的背景を持つのも

事実であり、そのすべてについて把握するのは無理である。しかし、異文化能力を育むためには、言語と文化が実際に絡み合っているところに学習者の目を向けさせる工夫が必要とる。たとえば、日本人の英語話者が英語の発話行為を捉えるときに、日本文化に根ざした常識や価値観に基づいて判断してしまうことも考えられる。そこで、授業では、「英語で謝罪するとき、あるいは謝罪されたとき、何を元に判断するか」を学生に内省的に考えさせると、スピーチ・アクトなどの発話行為をいかに文化的な知識や前提に基づいていた解釈をしているかということについて気づかせることができる。学習者は、まずは自分自身の言語的判断が文化の影響を受けているということをおある程度意識できれば、他者も同様にそれぞれの文化の影響を受けているということをより具体的に理解でき、それが異文化能力の向上にも還元される (Liddicoat & Scarino 2013; McConachy 2013)。文化的に異質な他者と積極的に交流していく態度など、言語に頼らない一般的な素質を養成するのも大事だが、英語が国際共通語として使われるときに、どのような発話行為が文化の影響を受けやすいかということを学んでいくのも重要だろう。

4. まとめ

英語教育に限らず、従来の言語教育パラダイムでは、その言語の母語話者が有するとされる communicative competence の習得が主たる目的とされてきた。日本においても、「英語ネイティブ・スピーカーが話す英語こそ本物」という思考が依然として強く残っており、多くの英語教育関係者がそのような認識の下で活動している。しかし、実際のところ、日本人英語話者は英語と日本語という二つの言語を使う以上、母語話者とは根本的に異なっている。日本文化に根ざして育ってきた日本人にとっては、英語を話すという行為は、本質的には異文化間行為であり、鳥飼氏が主張するように、必ずしも英語ネイティブ・スピーカーのまねをする必要はないだろう。このような認識は確かに従来の英語教育では欠如しており、今後、英語教育のこうした intercultural な側面について積極的に議論していく必要がある。本書が一般人に手に取りやすい新書として刊行されたことで、問題意識の醸成に貢献しやすいという点においても、重要な一冊と言える。

参考文献

- Bourdieu, P. (1991). *Language and Symbolic Power*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Liddicoat, A.J., & Scarino, A. (2013). *Intercultural Language Teaching and Learning*. Chichester: Wiley-Blackwell.
- McConachy, T. (2013). Exploring the meta-pragmatic realm in English language teaching. *Language Awareness*, 22 (2), 100-110.
- Meier, A.J., (2010). Culture and its effect on speech act performance. In A. Martinez-Flor & E. Uso-Juan (Eds.), *Speech Act Performance: Theoretical, Empirical and Methodological Issues*. Amsterdam: John Benjamins.
- 鳥飼玖美子 (2011). 『国際共通語としての英語』 東京：講談社現代新
- Wierzbicka, A. (2006). *English: Meaning and Culture*. New York: Oxford University Press.